

追悼集会報告

2020.01.13

○糟谷君と同じ岡大法文学部法科2-1のクラスメートでした扇谷です。

○糟谷君を知っていただくために、最初に、1968年から1969年にかけての岡大闘争についてお話しします。私たちは、1968年4月に入学し、通常の授業を受けられたのはほぼ半年、その年の9月17日に大学の自治権確立を訴えて岡大闘争は始まりました。

○私たち法科2-1は、クラスで闘争委員会「コムネの会」を立ち上げ、クラス討議によるデモや集会参加、通信を発行するなど、当時、地方大学における先駆的・典型的な全共闘運動を展開していました。糟谷君は、クラスの中では目立たない、非常におとなしい性格の学生でした。

○翌年1月20日に全学スト権を確立し、ストライキ・大学封鎖に突入します。

その年4月12日、機動隊が導入され、全面衝突しました。そして、大管法施行を前に、全学ストライキを続けており、全国で最も廃校の可能性のある大学でした。しかし、施行日の前日、9月16日、全学ストライキ中の大学に、再び機動隊が導入され、強権的に封鎖を解除、授業が再開されました。

○このような運動の挫折感の中で、11月13日、大阪扇町闘争に参加した糟谷君は、権力に暴行を受け、虐殺されたのです。

○当時、私たちは、組織に参加していないノンポリ学生だった糟谷君が、大阪扇町闘争に参加していたこと自体に驚きがありました。この事は、彼が日記に残した『犠牲になれと云うのか。犠牲ではないのだ。それが僕が人間として生きることが可能な唯一の道なのだ。』という言葉に、当時の糟谷君の一途に思いつめた葛藤・苦悩が表れていると思います。

○私たちは、地方大学の一学生として純粋な思いで全共闘運動にかかわりました。私自身も、その後、自ら大学を去り、その後の50年の人生において、常に、「何が正しいのか」「人としてどうあるべきか」を問い続け、生きてきたと自負しています。

○ネット上では、糟谷君は“昭和期の新左翼活動家”と出ていますが、決してそうではありません。

○一人の人間、学生として、真摯に社会と向き合い、自らが正しいと信じる行動を起こす中で、権力の暴力によってその尊い命を奪われたのだ、ということを経験に残していただきたいと思います。

○糟谷君追討50年に当たり、糟谷君を知る数少ない一人として、発言の機会をいただいたことに感謝申し上げます、私の報告とさせていただきます。

(おわり)